The Adventures of SONIC the Hedgehog

大人気！ ゲーム読み物

ソニックの大冒険

もうひとりのニッキがいる？

「キャアア～～～～！」

エミーの悲鳴は、町中にこだまするように響きました。

「どうしたの、何があったのよ！」

さっそくパティやモニカ、それにリトル・ジョンも駆けつけてきます。

そして、エミーが巨大なクモに捕まり、みるみるうちに連れ去られていくのを見て、

「ぴィ～～～～！」

いっせいにおかしな悲鳴をあげました。

「ど、どうしよう！」

ニッキは、ただもうオロオロするばかり。

「どうしよう！ どうしたらいいんだ！」

その間にも、どんどん人が集まって来ます。

「こらぁ～！ 待ちなさい！ エミーちゃんを返すのよ～！」

ウィング先生は、そう叫んで、持っていたケーキをクモに向かって投げ出しました。

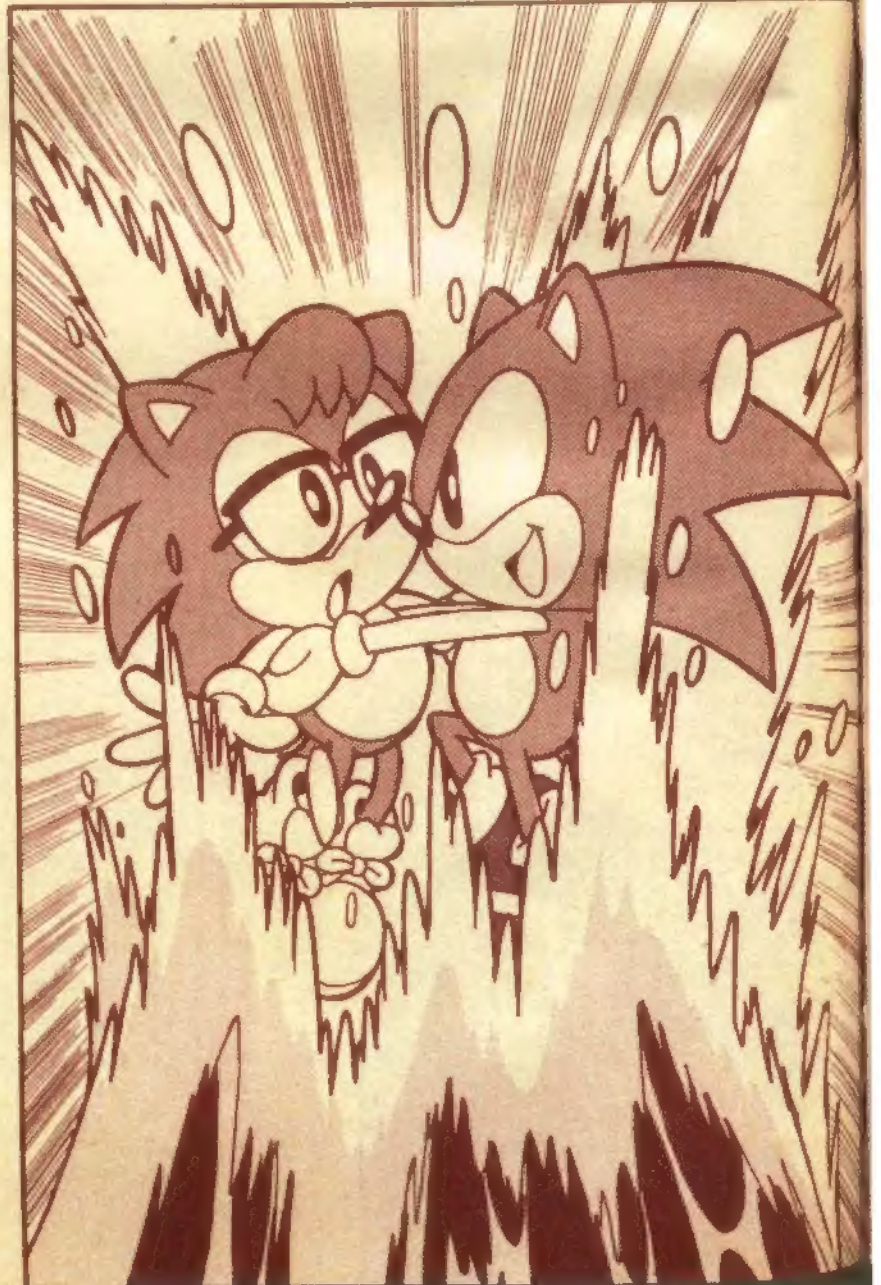
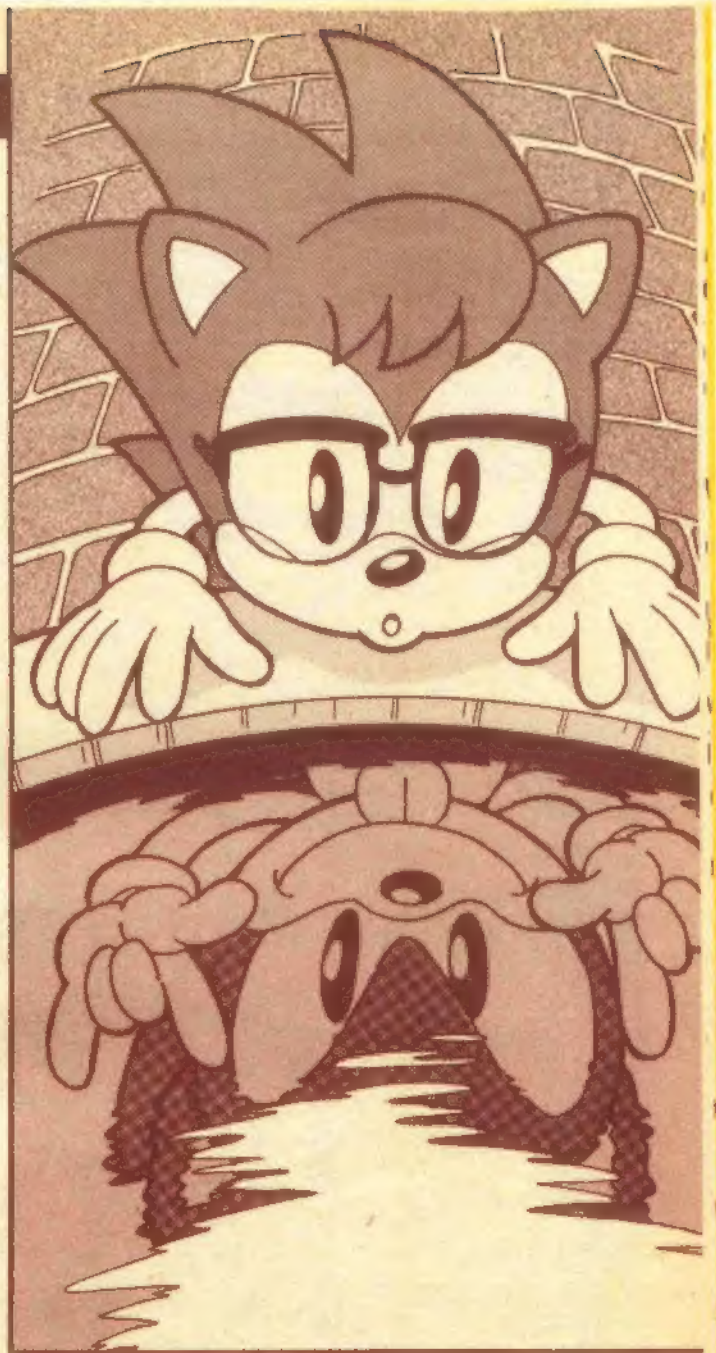
パティやモニカ、それにニッキもすぐにウィング先生に続きます。

でも、ニッキは、内心すっかりしょげ返っていたのです。

なぜかって？

だってニッキは、エミーが危機におちいったというのに、何もできなかったからです。

作／寺田憲史　絵／松原徳弘（パステル）

ってはいません。
でも、そのかわり、今度はジレったそうに、ニッキのことを「もっとこっちへ来い！ 近づけってば」っていう顔をしてみせています。
そうです。
これは、実はニッキが十六歳になった時の姿で。
そして、〈超光速エネルギー〉を受けて、スーパースターになった時の姿、ソニック・ザ・ヘッジホッグだったのです。
でも、もちろん、今のニッキがそれを知ってるはずがありません。
ただし、水に映る自分（？）が、何かをひっしに話しかけていることだけはわかりました。
それは、エミーのことです。
エミーを救わなくっちゃ！ 巨大グモをやっつけなくっちゃ！
声こそ出せないようだけど、手を使ったりして、たしかにそう言っているのです。
でも、どうやって……？

水面に映るソニックは、「どはぁ～、じれったいヤツだぁ～～～！」とばかりに、髪をかきむしり。
そして、イライラがバクハツしたぁ～、って感じに、ザバ～ッと水面から少し浮かび上がりました。そして、
「うわ～！ な、何するんだぁ～！」
と、あわてるニッキを、ガシッとつかむと、そのまま水槽の中に引き込んでいったのでした。

エミーがベルーカ・ブラザースに連れていかれようとした時も、ビビってしまって手が出ませんでした。
そして今、目の前でエミーがさらわれたというのに、「どうしようどうしよう！」と考えてばかりです。
ニッキは、こんなふうにいつだって考えこんじゃうほうなのです。
それが、いい時もあるけど。
でもやっぱり、自分の大好きな友達が目の前でやられているのに、すぐ立ち上がれないっていうのは、ちょっとナサケナイ、って感じてしまったのでした。
ビリビリビリィ～～！
とうとうヘッジホッグ警察から、おまわりさんが応援に駆けつけてきました。笛を鳴らし、やじ馬たちを後ろに下がらせます。
でも、巨大グモは、なんたってエミーを捕まえているのです。そう簡単に、おまわりさんのほうから攻撃するワケにはいきません。
まず、エミーがおっこちても大丈夫なように、地上で大きなアミを張る作戦に出ました。
そんな騒ぎの中で、オロオロしていたニッキは、ドン！と背中を押され、あれよあれよというちにどんどんエミーから離れたところに押しやられてしまったのでした。
そこは、公園のすみっこにある小さな噴水の前でした。
三メートルぐらいの水槽に、チャポチャポっとナサケナイ感じに噴水が出ています。
ニッキは、その弱っちぃ～噴水が、まるで今の自分とソックリだ、なんて思ってしまいました。
たしかに、そうです。
水面に映る自分の顔の、ナント弱っちぃ～こと！
あの、いつも元気イッパイで、勇気あるお父さんのムスコとは思えないや。
ニッキは、ますます自分がいやになってきました。
すると、どうでしょう！
ニッキは、次の瞬間、とってもフシギなものを見たのです。
「あわわ……？」
それは、水槽に映る自分の顔でした。
それが、ナント、自分に向かってベロベロバァ～！ってやってみせてるではありませんか。
「こ、これは？」
しかも、よく見るとちょっとだけ自分とは違っています。
第一、メガネをしていません。
それに、ニッキよりもいくつか年上のようです。
でも、フシギなことは、まちがいなくそれは、水に映った自分自身だってことです。
「キ、キミは、……いったい？　ダレなの？……まさか、ボクってワケじゃ、ないよね？」
水面に映る顔は、もうベロベロバァ～をや

やぁ〜！」

スパイダンの中で、オムレッツがひっくり返って叫びました。

でも、エッグマンは不敵な笑みを浮かべてこう言ったのでした。

「バ〜カめ。あれは、スパイダン・ネットの中でも、このワシが改良に改良を重ねたモノだ。その名も、……〈どこまでも追っかけネット〉！」

「だなや？」

さて、そのスパイダンのそとでは、大騒ぎになっていました。

スパイダンの腕から自由になったエミーが、ポプラの木の枝にひっかかってしまったのです。

「キャアー！　エミーちゃぁ〜ん！」

と、ウィング先生。

おまわりさんたちが張ったアミまでは、まだまだいぶ高さがあります。とても、飛び下りることができる高さではありません。

「あ〜ん、ウィング先生〜！」

エミーは、ゆらゆらと揺れる枝にひっしにしがみつきましたが、すぐに目を回して気を失ってしまったのでした。

でも、大丈夫。

「なぁ〜に、心配するなって！」

ソニックは、そう言うと、シュンと空中で回転してエミー救出に向かいました。

ところが！

次の瞬間、ビシュ〜！　ソニックは、両方の腕に強力な電磁波を受けたように、痛みを感じ取ったのでした。

「あうっ！　こ、これは……？」

よく見れば、それはスパイダンのはいた糸でした。糸が、いつのまにかカレの腕にぐるぐる巻きに巻き付いていています。

ソニックは、たしかにそれをすばやくかわしたつもりでしたが、きっと追いかけてきたのです。

しかも、その糸はまるでそれだけでも生き物のようにうごめき、そしてどんどん増え続け、あっというまにソニックをしばりあげていってしまったのでした。

「きゃ〜っ！　ソニック〜！」

悲鳴を上げる子供たちをよそに、スパイダンの中は、もう大喜びです。

「どぅわ〜っはははは〜〜〜！」

という笑い声と、

ぷぷぷぷ〜〜！　というオナラが、スパイダンの操縦席にじゅうまんしていきました。

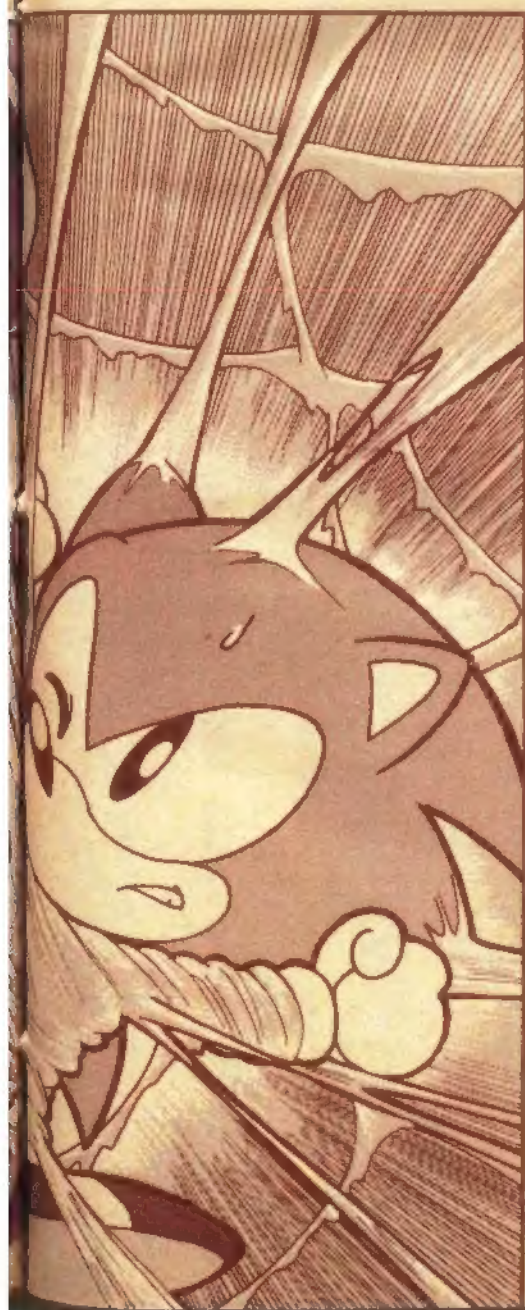
「見たか、見たか、〈どこまでも追っかけネット〉の威力を！　あれはな、ひとたび発射されると、超光速エネルギーを感じ取ってどこまでも追いかけるようにできているのじゃ！」

ソニックの力が、みるみるうちに弱っていきます。

ザバ～ン！
大きな水柱が上がりました。それと同時に、まばゆいばかりの光が飛び散りました。
　巨大グモに捕まったエミーを必死に追っていた人びとも、さすがにその光のほうに目をやりました。
　するとその時、人びとは、光の渦から青いカタマリがビシュ～っと飛び出してくるのを見たのです。
　そして、青いカタマリは、いきなり巨大グモに攻撃をしかけて、こう叫んでいたのでした。
「ロ～リング・アタァ～ック！」

かえってきたソニック！

「ソニックよ！　ソニック・ザ・ヘッジホッグだわ！」
　パティやモニカが、大喜び。でも、
「ソニック？」
　ウィング先生は、とつじょ現れた超光速の少年に目をシロクロさせています。
「やだ、先生、知らないの？　……光速を超えたニクイやつ……」
「ソニック・ザ・ヘッジホッグ！」
　そして、子供たち全員が口をそろえて、
「ドッカ～ン！」
　叫んでいたのでした。
　さて――――。

　いっぽう、巨大グモ〈スパイダン〉の中では、ドクター・エッグマンとオムレッツがひっしに応援しています。
「ぬははは～～、現れおったな現れおったなソニック・ザ・ヘッジホッグ！」
「だなやだなや！」
「このエッグマン、お前を捕まえるために、わざわざこんな騒ぎを起こしてやったんだぞい。きち～んと、キサマをとっ捕まえる用意をしてなぁ！」
「それ、やるだなや、ドクター！」
「アイアイサー！」
　エッグマンは、思わずオムレッツに敬礼。でも、すぐに、
「あん？」
となって、オムレッツをド突きました。
「このバ～タレ！　命令するのは、このワシじゃい！」
「だなやぁ～！」
　オムレッツは、スパイダンを操作して、ソニックに攻撃を開始しました。
「それ～！　スパイダン・ネット・バリア～だりあ～！」
　ビシュビシュ！
　スパイダンの口から、クモの糸のようなものが飛び出しました。
「へっ！　そんなモンで、オレ様を捕まえられると思ってるのか！」
　そこは、光速を超えたニクイやつソニックのこと、シュンとクモの糸をかわし。
　そして、またまたローリング・アタックのカッコウになると、
「た～っ！」
　エミーを捕まえるスパイダンの腕を、バキッ！と叩き折ったのでした。
「ぎゃあ～～～！　ドクター、やられただなぁ

「こんのヤロ〜！　もう、カンベンしねぇ〜ぞ〜！」
っと叫んで、スパイダンに飛びかかっていったのでした。
その様子を見て、飛行機の中のポーリーが、思わずほほえみました。
「ははっ……、悪い言葉使いまで、よく似てるな。」

パシャッ！
ニッキが、噴水の水槽から起き上がった時、もうスパイダンの姿はどこにもありませんでした。
でも、けっして騒ぎが収まったワケではありません。
なぜって、高いポプラに引っかかったままのエミーが、いまだに救出できないでいたからでした。
消防車も到着して、ハシゴをのばしてみましたが、それでは届きそうにもありません。
ヘッジホッグ・タウンには、高いビルみたいなものがないために、それほど長いハシゴがなかったのです。
それで、だれかが、ポプラに登って助けることになりましたが、大人では体重が重くて木が折れそうです。
でも、子供にそんなことできるでしょうか？
その時、「どうしようどうしよう」と騒いでいる人びとの間をぬうようにして、一人の男の子が進み出ました。
「あの、ボクがやってみます！」
ニッキでした。

ニッキは、もうここで自分が何かエミーにしてやれなかったとしたら、これからずーっとずーっと後悔しちゃう、と思ったのです。
それに、本当は、自分の中のもう一人の自分に、こう言われているような気がしたのです。
「だいじょうぶさ。やってみな。オトコは、やる時は、きちっとやってみせなくちゃな。」
そんなニッキにあわてたのは、ウィング先生でした。
「ダメですよ、ニッキくん。いくらなんでも、アブナイわ。」
でも、その時、
「やらせてやって下さい。」
ニッキのお父さん、ポーリーが現れて言いました。
「お父さん！」
「ニッキ！自分でやれるって思ったんだろ？だったら、やれる。自分を信じればいいさ。」
ニッキは、力強くうなずくと、ポプラの木を勢いよく登りはじめました。
だいじょうぶ。
出来るよな、ソニック。
お父さんは、その時、なぜか自分のムスコのニッキが、あの伝説のパイロットのはげましの声を聞いていると確信していたのでした。

『ソニックの大冒険』おわり

★一年間ソニックを応えんしてくれてありがとう。いつかまた会おうぜっ！

「クッソ〜、な、なんてことだ！　オ、オレのエネルギーがどんどんこの糸に吸い取られていくぜ。」

伝説のテスト・パイロット

でも、その時、ソニックは、耳をつんざくようなごう音をきいたのでした。

それは、飛行機のエンジン音。そして、なぜかソニックが大好きな音だったのです。

ゴ〜ン！

スパイダンで大騒ぎの町の上空に、一機の水上飛行機が飛んでいました。

それは、ヘッジホッグ・タウンの人ならみんな知っている飛行機でした。

毎日、遠い所からいろんな荷物を運んでくれる水上飛行機。リトル・ジョンが、叫びました。

「あっ、ニッキのお父さんだ！」

あん？　ソニックも、思わずその飛行機を見上げました。

そして飛行機を運転しているニッキのお父さん、ポーリーもソニックを見ました。

「あ、あれが、ソニック？　その名前を聞いてもしやと思って来てみたが、ほんとにフンイキがよく似てる。」

実は、ポーリー、昔は、超光速ジェットのテスト・パイロットでした。

そしてその時、命の恩人とも言える一人の親友がいました。その人の名前が、ソニックという名だったのです。

ソニックは、光速の壁を破った男と言われ、いまでもパイロットたちに伝説の男として尊敬されています。

カレは、超光速で飛行中、事故にあって死んでいます。でも、それ以後、パイロットたちの守り神として今でもどこかで生きていると信じられているのです。

これまでに、何人ものパイロットが光速飛行中危ない目にあっています。でもそのたびに、彼らは、伝説の英雄ソニックの声を聞いて助かっているというのです。

ポーリーは、ここのところタニアやエミーがソニックという子の話をするたびに、もしかしたら、あの親友のソニックと関係があるのではと思っていたのです。

ちょっとつっぱって、超光速で走り回るソニックは、昔の親友にソックリでした。

「もしかしたら、このソニックは、あいつの生まれ変わりかもしれんぞ！」

ポーリーは、すっかりうれしくなって、ゴ〜ンゴ〜ン！とエンジンを響かせました。

これは、飛行機のエンジン音がなにより好きだった男へのはげましの意味でした。

すると、どうでしょう！

ソニックが、みるみるうちに元気になっていったのです。そして、

「なんだか、よく分かんねぇ〜が。おかげで、力わいてきたぜ〜！」

バリッ！

ソニックは、一気にスパイダンの糸をかき切ると、